

指導者（保護者）として大切にしたいこと（その9）

2020年1月吉日

広島地区ミニバスケットボール連盟

副会長 大庭 浩 資

広島地区ミニバスケットボール連盟の保護者の皆様、指導者の皆様、役員の皆様、いつもお世話になっております。

令和2年が始まりました。いろいろな改革が始まる年となりますが、広島地区連盟としては、たとえ組織が再編されたり名称が変わったりしても、丹会長や上田理事長のもと一致団結して、バスケットボールを愛する子ども達のためにお互い頑張っ参りましよう。本年もどうぞよろしくお願ひいたします。

さて年末から年始にかけて、いろいろなスポーツが行われ、おそらく皆様もテレビ等で観戦される機会も多かったことと思ひます。

私もテレビに釘付けで多くの感動を覚えました。そしてスポーツの楽しさはもちろんのこと、チームで協力することの大切さ、勝負の世界の厳しさ、監督・コーチの采配の大胆さや緻密さなど、素人ながらいろいろ考えさせられました。

そんな中でいくつかのスポーツについて、新聞記事を参考に私の所見を述べてみたいと思ひます。とても長いものになりましたが、どうぞおつきあひください。

まずは年末に行われた「ウインターカップ(全国高校バスケットボール)」についてです。

福岡県対決となった男子決勝戦は、福岡第一が福岡大大濠を破り2年連続の優勝を飾りました。東京調布市の会場は、福岡県同士の対決にもかかわらず、約1万人の観衆で埋まったそうです。まさにバスケットボール人気を象徴する数字ですね。

この試合で注目を集めたのは、福岡第一のポイントガード(PG)河村勇輝主将です。なんと10得点、13リバウンド、11アシストと「トリプルダブル」の活躍でした。身長が172cmのPGですから、10得点、10アシストは普通としても、13リバウンドはすごいですね。しかも相手ディフェンスは190cm。ガードにもかかわらず自らリバウンドにいくガッツあふれるプレーで、チームのみんなを引っ張る姿はすばらしい主将でした。「リバウンドを制する者が試合を制する」の言葉通りです。また身長がそんなに高くない選手でも、努力すればこれだけのプレーができることを証明してくれました。

珍しい光景だった。試合終了のブザーが響く。福岡第一に喜びを爆発させる選手は誰一人いない。敗れて涙を流す福岡大大濠の選手たちと抱き合っ、健闘をたたえ合っ。「しのぎを削ってきた相手への感謝があっ」と河村主将。同県のライバル関係だけではない。河村にとって、福岡大大濠はバスケット人生を変えてくれた、大きな存在でもあっ。

2年前の大会。172cmの1年生PGだった河村は大会序盤から活躍し、注目を浴びた。日本一への切り札として準決勝の福岡大大濠戦に先発出場も、終盤に逆転され3点差で惜敗。自信を深めていたボールコントロールなどの技術は通用しなかった。「自分のスタイルが拒否された。人生で一番の屈辱だった」。先輩たちに迷惑を掛けたとの気持ちも重なり、宿舎では号泣した。

自分を見失いそうな敗戦だったが、決してあきらめなかった。先輩たちからの励ましもあり「これから福岡大大濠には全部勝つ」と決意。ゴール下のインサイドだけでなく、外角からのシュートを増やすなど、プレーの幅を広げた。

2年時は無敗。主将となった3年時は大学の強豪、日体大と同じ強化メニューを取り入れ、走り込んできた。今季8戦負けなしで迎えた決勝戦。身長で約20cm上回る相手に徹底マークされた中で、10得点、13リバウンド、11アシストの「トリプルダブル」を達成。2年前の敗北から全勝を守り、大舞台での借りも返した。

次は箱根駅伝についてです。

今年の箱根駅伝は、青山学院大学が昨年の雪辱を果たし、2年ぶり5度目の総合優勝を飾りました。

優勝した青学大の原監督は、レース後のコメントで、真っ先に高校の指導者に感謝しました。そう言われれば高校の監督さんは嬉しいものです。常に謙虚である原監督の姿勢を、私自身、大いに学びたいと思いました。

さて今大会の特徴は、なんと言っても記録づくめの超高速駅伝であったことです。総合タイムが大会記録を6分46秒も更新されたのを始め、7つの区間で新記録が出たのもなんと66年ぶり。しかもそれぞれの新記録が信じられないタイムで本当に驚きました。

この記録づくめの一因としてナイキ社の厚底シューズが挙げられています。この「魔法の靴」について各校の監督や選手のコメントが載っていました。

それぞれのコメントには、それぞれの思い（コメントできないことも含めて）がありますが、ほぼ共通しているのは、「最終的には選手の努力、人間づくり」ではないかと感じました。

東洋大 相沢選手（2区区間新）

- ・推進力はあると思う。ただ履いている人によって差が出ている。しっかり練習している人が結果を出している印象が強い。つまり選手自身が使いこなせているかどうか。そこが大きな分かれ目になるのだと思う。今回は走った10人全員がナイキを履いた。

明治大 安部選手（7区区間新）

- ・ロードでは推進力が出て、足へのダメージが少ない。賛否はあるが、選手として貪欲（どんよく）であることは必要。いい靴があればもちろん履きたい。ただ、努力し

ないと使いこなせない靴だと思う。

青学大 原監督

- ・今回からナイキの靴を解禁した。各社がテクノロジーを進化させ、技術力の向上につながっているのは感じている。しかし走るのは選手の足と心臓。選手たちは一般学生と違いストイックな生活をしている。そこを強調したい。

東海大 両角監督

- ・物体が前に力強く動いていける動作、角度をスムーズに作り出してくれている感じだ。疲れていても、膝を動かしていると進んでいく感じがある。ただないものを、ある形にするわけではない。持っているものを、うまく引き出す技術革新があったということ。

駒沢大 大八木監督

- ・多少なりとも、影響はあるのかなという感じ。ただ、ちゃんと選手をつくっているかが一番重要で、そこに良い道具があったというところ。

次はアメリカンフットボールについてです。

アメリカンフットボールのライスボール（日本選手権）に出場した学生代表の関西学院大学の鳥内秀晃監督（61）は28年間にも渡る采配のラストゲームでした。

「スポーツは人間づくり」を念頭に指導を続けてこられた名物監督が、また一人勇退されていきます。

鳥内監督は、普段から選手に「どんな男になんねん？」と問いかけ、選手自身に答えを導き出すように促してきた。奥野選手は昨年2月の面談で、その問いに「日本一に導けるQBになる」と宣言。

一昨年、日大の悪質タックル事件で被害者になった奥野選手にとって、指揮官最後の試合への思いは格別だった。「アメフトだけじゃなく、人として当たり前のことを当たり前にすることを学んだ。人としてどんな人間になるのか、下級生に伝えていきたい」とその精神を受け継ぐ覚悟を示した。

普段は選手に「なめとる」と辛口の名将だが、タックル事件で奥野選手が全治3週間のケガをすると「汚いプレーはフットボールではない」と痛烈批判。だが、謝罪した加害選手の誠意に触れ「私としては（競技を）続けてほしい」と口にした。

試合が終わって「ホッとしている。もう何も考えなくていい。重要なところでミス、反則があるのは甘い。うちは期待されるチーム。注目されればまだ伸びる」。指揮官としてラストでも、教え子を思う愛に終わりはない。

奥野選手が特に印象に残った言葉として挙げたのが「自分の親、監督、コーチに見られて恥ずかしい行動はするなよ」だった。

マネージャーの橋本典子（4年）は「歩きスマホ、ながらイヤホンをやめさせろ。ケガのリスクもあるし、相手をケガさせることもある。みつともない。人間的にダメだったら、勝っても意味がない」と言われたという。マネージャーにもストレートに語る。「この時代には貴重。ありがたいことをズバツと言ってもらえる。きつい言い方をされるけど、まっすぐに怒ってもらえて幸せ。本当に強いチームに立ち向かうときに、力になって戦える」と、選手も裏方も指揮官への感謝は尽きない。

最後に全国高校サッカー選手権についてです。

この大会に関して、以下の記事がありました。なんだか、来年度からいろいろなシステムの変わるバスケットボール界の未来を示唆しているように感じたので紹介します。

冬の風物詩でもあるこの大会の始まりは、1917年なので、今年で98回目を数える。1934年にはほぼ現行の方式ができあがった。そして部活動という日本独自の文化で日本一を競い合ってきた。

しかし、1991年にJリーグ発足後、プロクラブのユース整備が進み、06年には各世代別日本代表は、高校出身ではなく、Jユース出身者が半数を超えた。

11年にはJユースと高校の強豪同士がリーグ戦を行い、ユース年代の最高峰といわれる東西プレミアリーグが設立。しかし参加20チームの中で高校の数は今季6から来季4と設立以来最小になる。

今大会に出場した東久留米総合の加藤監督（34）は、「ユース年代の1年間の試合スケジュールは、とても選手ファーストです」と話す。一方で「子ども達は選手である前に、生徒。その観点では生徒ファーストではなくなってきたと感じます」。そして12月まで続くリーグ戦に対して「受験のことを考えると、早めに3年生を引退させてあげたいとの気持ちがないと言えようそになる」と続けた。

サッカーで卒業後のキャリアを切り開く選手は一握りである。生徒であり選手である自身をどう律し、両立するか。一方で受験勉強を優先し、早めに引退を決断することも一つの選択肢となりそうだ。

現在、高校年代の選手は大きく分けて、①部活動 ②高校に通いながらJユースクラブ ③通信制の高校に入ってJユースクラブ の3通りである。

近年は今大会の3年生と同年代の久保建英のように、幼少期から海を渡る選手も出てきた。17歳のMF中井卓大はRマドリードの下部組織に所属。

かつて「夏の甲子園、冬の選手権」とも言われたが、時代は変わった。事実上、一本道の野球と比べ、サッカーの高校選手権は全員が出るものというより、選択肢の一つという位置づけになりつつある。

サッカー日本代表がワールドカップで活躍すれば、日本中が盛り上がります。そのためにはやはり強化が必要です。

その一環としてJユースクラブができたり、プレミアリーグが設立されたりしました。当然レベルの高い練習や試合を数多く行うことで、技術は上がってきたと考えるのが普通でしょう。

でも、本当にこれらに所属するチームの選手の多くで、日本代表が結成されているのでしょうか？ どうやらそうではないようです。

来年度から「U-12」となるミニバスケットボールの世界ですが、バスケットボール界全体も、サッカーと同じような道をたどるのでしょうか？

私は続いて書かれていた以下の記事にも大変興味をもちました。

そして、最後にある監督さんの話を読んで、少なくとも広島地区の指導者としては、ミニバスケットボールを指導する上での趣旨や目的を忘れてはいけないと感じました。

試合で勝たせたい、選手に勝つ喜びを体験させたいと思うのはどの指導者も同じです。また選手も技術が高まれば、バスケットボールが面白くなり、もっともっと好きになるでしょう。そのために我々指導者自身が常に学ぶことを忘れず、互いに切磋琢磨しながら指導技術を磨かなければなりません。

しかし試合で勝つことは一つの目的であり、勝つことがすべてではないことを指導者は忘れてはいけないと思います。

「選手ファーストではなく、児童ファースト」

バスケットボールの楽しさ、面白さを伝えたり、今後も長く続けてくれる子ども達を育てたりすること。また学校生活や社会におけるマナーやルールの大切さを教えること。さらにお世話になっている多くの方々への感謝の気持ちを忘れないこと等を語り続けることも、我々指導者の大きな責任です。

Jユースの進化で勢力図が変化する一方、意外なことに、A代表になると現在も高校出身者が多いことも事実。ベスト16に進んだ2018年杯ロシア大会でも、代表23人中12人が高校出身者だった。

日本サッカー協会（JFA）の技術委員で暁星高校の林義規監督（66）は「（普通の高校生活で）価値観の違う人と接することが大切。サッカーに価値観を感じない人もたくさんいる。『サッカーができる（上手である）からいい』という感覚にならないことと、教育の一環としての部活動の長所を口にする。」